

善意の風を受けながら： 百年史編纂に寄せて

金丸 英子



2006年に創刊された「西南学院史紀要」も今回で第8号目を迎える。2016年の学院創立100周年を記念する「西南学院百年史」の刊行を睨んでの企画であった。創刊にあたって、当時の斉藤末弘学院理事長が祝辞を、寺園喜基院長が巻頭言をそれぞれ寄せてくださったが、そこには「学校法人の歴史とは『人間の歴史』に他なりません。建物の歴史ではありません」、「学院史を振り返ることは、先達を等身大に引きよせることでもある」など、編纂作業の道しるべとなるような言葉がいくつも記されている。爾来、本紀要は休刊することなく今日まで続けられてきたが、それは事務の方々の働きと共に、毎回の依頼に快く応じてくださった西南学院を愛して止まない多くの方々の協力の賜物でもある。それらの方々にこの場を借りて改めて感謝を申し上げたい。2012年3月に定年退職で編纂委員長を退かれた小林洋一先生に代わって、4月から編纂委員長を引き受けることになった。専任教員となって日が浅い上、能力も経験も乏しいばかりか、これまでの人生で「長」と名のつく仕事とは無縁であったので自信もないが、百年史に対する思いを記すことで巻頭言にかえさせていただきたい。

15年以上も前、筆者は学位論文執筆の最中であつたが、その過程でどうしても邦文資料の閲覧が必要となつたため、留学先から約1ヵ月間帰国し、国内の数カ所における資料閲覧を余儀なくされた。その中に母校である西南学院も含まれていた。その間、ほぼ1週間、現在は西南子どもプラザとなっている当時の広報課の書庫に籠った。その合間に、本館にも通った。当時の書庫は、スペースや資料保存の仕方に若干の難点はあったものの、必要な史・資料のほとんどは手に入れることができ、それらの複写も許されて論文完成にこぎつけた。その間、内心、「よくぞ残っていてくれた」と息を飲んだ資料も少なくなかつた。今回重責を引き受けるかどうか迷いに迷っていた時、その時のことが思い出され、「もしかすると、遠い将来、当時の私のように学院の歴史をひもとく必要を携えて西南を訪ねる人が現れるかもしれない」と思うようになって

た。そして、その時のためにも、残しておくべきものは残さねば、と考えるようになった。

同時に、100年という歴史の節目に学院に居合わせる者としての責任も考えるようになった。100年を迎えて、これまでの学院の歴史から何を記憶し、語って、後から来る人たちに残すだろうか。これまで学院が存続してきたという喜びと感謝を噛みしめるに留まらず、その長い旅路において、絶えず学院が拠りどころとしてきたもの、それをもって学院の歩みを前に進めさせたもの、それに押し出され、引っ張られながら歩んで来た先達の姿とその仕事を、拙くとも後に伝える責任が100年目に居合わせる者たちにはあるように思われた。これまでの西南学院の歴史の光と影を、それぞれ「等身大で」見ようとする誠実さが求められる。それ抜きには、自らの学び舎や職場に対する愛情や尊敬が生まれることは難しい。去る11月22日に、編纂委員会主催の第3回西南学院史講演会が行われ、第8代大学学長村上隆太先生を講師にお迎えしてご講演をいただいたが、改めてその感を強くしているところである。

「西南学院百年史」に対する期待や思い入れは、各人異なっているかもしれない。その上で、学院資料から多くを学び、その恩恵を受け、偶然にも百年史編纂に携わる幸いに与る者としていま心にある2、3のことを記させていただきたい。学校法人の歴史が「人間の歴史」であるならば、そこに関わった人々の、光や影も含めて、その息づかいや足跡が伝わるような百年史になるならばどんなにすばらしいだろうか。人生のひとつコマに西南での日々を数える人たちが、そこに自らの青春の日々を見つけ出せる百年史になるならばどんなにすばらしいだろうか。百年史は、学院の名前で出版されるが、100年の学院の歴史は、法人のものでも編纂委員会のものでなく、これまで西南学院に連なってきたひとりひとりのものであろう。そのために、今回は、早緑子供の園から大学院に至る各校と事務局を含む各部会が動き出そうとしており、研究会の開催も計画されている。月1度の編纂委員会も積み重ねられて来た。刊行の2017年まであと4年余り。多くの方々の善意の風を受けながら、関係する方々と共に前に進ませていただきたい。